

終末予言とマインド・コントロールと 権威への服従

——オウム真理教事件の社会心理学的分析——

沼田 健哉

1 はじめに

ノーベル賞受賞者のユダヤ人，エリー・ウィーゼルは，子供のとき，ただ神のためにだけ生きていたという。少年となった時彼は，アウシュヴィッツともう一つの収容所に入れられ，「死のキャンプ」での最初の夜，彼の母と妹が焼かれた焼却炉の黒い煙を見つめて，その炎が彼の信仰を永遠に焼き滅ぼしてしまったのを知ったという。

彼は，後に以下のように書いている。「生きたいという願望をわたしから永遠に奪ってしまったあの夜の沈黙を，わたしはけっして忘れないであろう。私の神と私の魂を殺してしまい，私の夢を塵に変えてしまったあれらの瞬間を，わたしはけっして忘れないであろう」¹⁾と。

筆者の現在の心境は，以下のようなものである。「人間と社会が善意により行動し動いているという幻想を，わたしから永遠に奪ってしまったオウム真理教事件を，わたしはけっして忘れないであろう。人間と社会に対する信頼を殺してしまい，私の夢を塵に変えてしまったこの事件を，わたしはけっして忘れないであろう。」そして，筆者は，研究者として当事件を分析する

1) Karen Armstrong, A History of God: From Abraham to the Present: the 4000-year Quest for God, Heinemann, London, 1993. カレン・アームストロング，高尾利数訳『神の歴史』柏書房1995年，496頁。

責務を感じている。

当論文の課題は、主として社会心理学の理論により、オウム真理教事件を、終末予言、マインド・コントロール、権威への服従、というキー・ワードを用いて分析することにある。さらに、もう一つの課題としては、社会心理学の理論のマクロな次元での分析の有効性を検証することがあげられる。

近年の認知心理学を基盤とした社会心理学の現状に対しては、社会心理学者の中からも他の分野の研究者からもいくつかの反省や批判がなされている。山岸俊男は、自分が現在の社会心理学に失望しているのは、社会的認知研究の底にある「孤立した情報処理機械としての人間観」に対してであり、そこには、個人と社会を理論的に結びつけようという、かつての社会心理学の有していた問題意識の欠如を指摘している²⁾。

当論文で用いる理論は、やや現代の理論とは異なるものであるため、山岸の批判はそのままでは当てはまらない部分があるが、筆者は、現代の社会心理学への批判は、理論そのものに対してのみではなく、研究者の視野の狭さに対してもなされていると考えている。

他の科学をみると、物理学では、最もミクロな量子に関する理論が最もマクロな宇宙の分析にとっても有効かつ不可欠なものとなっている。さらに、社会学をみても、マックス・ヴェーバーの理論においては、ミクロな視点からの考察がマクロな社会現象の分析にも生かされていることから判断すると、勝れた理論は、そのような特性を有しているものが多いといえる。それ故、もし、ミクロな次元でしかある理論が適用できないとしたら、その理論は、根本的な欠陥を有している可能性が少なくないといえよう。したがって、理論そのものに問題があるのか、それとも研究者の視野の広狭、もしくは、分析の目標に問題があるのかを慎重に考察する必要がある。

そのことはさておき、当論文は、オウム真理教事件の複雑な背景が完全には公表されていないという大きな障害を抱えている。筆者は、種々の方法に

2) 山岸俊男『社会的ジレンマのしくみ』サイエンス社1990年、243～246頁。

よってほぼその相当部分を把握したつもりでいるが、それを公表することは、何らかの個人的・社会的問題を喚起する可能性がある。そのため、主として公表されている資料や情報によって論を展開するが、オウム真理教事件は、当論文で言及しているよりも、はるかにより根底的かつ多元的な要因が介入した複雑な事件であることを最初に断わっておきたい。

以下、当論文においては、まず、カルト、とくに破壊的カルトに言及する。ついで、終末予言、マインド・コントロールと権威への服従、オウム真理教の終末予言に関して考察した後に、主として社会心理学の理論により、終末予言に焦点を当てて、オウム真理教事件の全体的分析を試みることにする。

2 カルトに関する考察

カルトに関しては、すでに筆者は、「マインド・コントロールとセルフ・コントロール——オウム真理教事件と関連して——」という論文において、考察しているので、当論文においては、前記の論文において言及しなかった内容について述べることにする³⁾。

マーガレット・シンガーは、カルトという言葉は以下の三つの要素を表わすとする。1. グループの起源と指導者の役割。2. 権力構造、すなわち指導者(たち)と信者との関係。3. 巧みに組み合わされた説得法(マインド・コントロールとか、もっと一般的に洗脳とも呼ばれる方法)を利用すること⁴⁾。

グループの起源と指導者の役割に関しては、以下の項目があげられている。ほとんどの場合、カルト構造の頂点に立つのは一人物、主に教祖であり、この人物に意思決定の権利が集中している。これらの指導者は、以下のような特徴をそなえている場合が多い。

3) 桃山学院大学社会学論集第29巻第2号1995年、61～94頁。

4) MARGARET THALER SINGER, CULTS IN OUR MIDST, Jossey-Bass Inc., 1955, マーガレット・シンガー, 中村保男訳『カルト』飛鳥新社, 1995年28頁, 以下同書による。

自分には人生で果たすべき何か特別な使命があるのだとか、特別な知識をもっているのだと吹聴するひとりよがりて説得術に長けた人物。決然として支配的であり、カリスマと言われることも少なくない。自分みずからを崇拜の対象とする。

構造・指導者と信者の関係に関しては、以下の項目があげられている。構造そのものが独裁主義的である。革新的で排他的である。二重の倫理基準をもつ傾向がある。

巧みに組み合わされた説得プログラムに関しては、以下のような特性があげられている。信者の行動をコントロールするという点で全体主義的、すなわち全体を包括するものであり、世界観において熱狂と過激な傾向を示すという点で、イデオロギー的な意味でも全体主義的である。信者のライフスタイルを中断させたり改めさせたりすることを、信者に要求するものが多い。

シンガーは、基本的には、カルトには、新しい信者や会員を集めることと、資金稼ぎという二つの目的しかないとする。そして、アメリカのカルトの主要なタイプとして、以下の10種をあげている。

1. 新興キリスト教派 2. ヒンドゥーなどの東洋宗教 3. オカルト、魔術、悪魔主義 4. 心霊術 5. 禅などの中国・日本の神秘哲学 6. 人種関係 7. 空飛ぶ円盤を始めとする外宇宙現象 8. 心理学ないしは心理療法 9. 政治 10. 自助、修養、ライフスタイル系統⁵⁾。

このような類型は、体系的でなく、正統的キリスト教以外の宗教に対する偏見がみられ、アメリカのカルト研究の特性を反映しているといえよう。シンガーは、カルトの主題は信仰とは何の関係もなく、すべてが指導者の欲望、気まぐれ、隠された目論見に役立つ道具となり果ててしまうので、その理解には、信仰より構造と活動内容の検討が重要であるとする。このような見解は、客観性に欠け、彼女が、キリスト教以外の宗教の十分な知識を有していず、宗教や信仰の本質を正確には、把握できていないことを示している。

5) 『同書』37頁。

しかし、カルトの歴史に関する考察にはみるべきものがある。シンガーは、1960年以後のカルトの出現と、19世紀、1820年から1860年にかけてアメリカで起こった宗教変動（第2の大いなる覚醒）とがしばしば比較されるとする⁶⁾。19世紀のカルト派は、キリスト教に代わる独自の信仰をもち、新しい独特の世界観を提示し、時には科学的ないしは擬似科学的な世界解釈を説き、アメリカにおける宗教というものの範囲を拡大したとみなしている。

これに対し、1960年代に発生したカルトは、新しいアメリカの環境のもとに生まれた。対抗文化運動の中には、心霊的なもの、東洋的なものへの顕著な志向があり、自己超越や悟り、世界平和への祈願、社会変革への願望等があった。この時期には、東洋式のカルトが数多く発生し、若者達の心を捉えた。

1970年代には、60年代の瞑想やヨーガや異国風の修行が目立つ東洋哲学を基盤にしたカルトに代わり、^{ネオ}新キリスト教的で政治がらみの、心理学に根ざしたカルトが台頭した。さらに、1980年代には、心理学カルト、オカルト・カルト、富裕カルトと類型づけられるものが急激に拡大した。このような類型化は、示唆に富むといえよう。

シンガーは、カルトの問題点として以下の項目をあげている。1. 無数の個人や家族に相当な被害を及ぼしている。2. 最新式の複雑な心理的・社会的な説得術を使って信者を集め、脱会を防ごうとしている。3. 持っている資金により、公正な批判や論評を抑えるために、訴訟を起こすと嚇すなどの、脅迫的な行動に出ている。4. さまざまな隠れ蓑をつけて社会の中に侵入しつつある独裁主義で、一般市民の自由を脅かす⁷⁾。

カルトの、公衆衛生問題の視角からの市民の生活への悪影響の具体例としては、以下の項目があげられている。1. 合法的な制度を脅かす。2. 子供たちに被害を及ぼし、家庭を四散させる。3. 暴力的である。4. 共謀と詐欺を犯す。

6) 『同書』60頁、以下同書による。

7) 『同書』125～126頁。

5. 大小にかかわらず個人や社会に被害を及ぼす危険性を有する。6. 自由を奪う。7. 財産を奪う。8. 監視の目を逃れ、他の団体や活動に加えられている制約を受けていない⁸⁾。

ついで、越智道雄は、カルトを「新宗教運動で生まれてきたラディカルな修行方法を持つ小規模教団」⁹⁾と定義し、一種の軽蔑語であるとする。越智は、キリスト教関係に限定すると、カルトはセクトより新しく、教祖が活躍中でそのカリスマが隆盛期にあり、まだ不安定な小規模教団を指し、世間への開放度も低いものを指すとする。しかし、カルトは、セクトと比較するとアメリカ合衆国においては、キリスト教起源以外の要素を内包する宗教教団を指す場合が多い。それ故、異教を邪教として排斥する一神教的風土の国家にみられる偏見を日本の研究者が、そのまま受容する事は適切とはいえない。

欧米でも、単なるカルトと区別して、とくに反社会性の明確な集団を「破壊的カルト」と命名している。このような、破壊的カルトに対して、反カルトの組織があるが、反カルト評論家のマーシャ・ルーディンは、各カルトに共通する特徴として以下の項目をあげている。1. 教祖をメシアと信じ絶対服従。2. 合理的思考の禁止。3. 信者のリクルート手段が欺瞞的。4. 信者にカルトへの依存心を高めさせて彼らの問題解決を幫助。5. 信者の罪意識を操作。6. 教祖が信者の経歴や重大な決断の全てを代行。7. 社会向上に貢献という偽の目的、実はカルトの物質的存続だけに固執。8. 信者はフルタイムで教団に無料奉仕。9. 信者を外界から遮断、現実感覚を破壊。10. 反女性、反子供、反家族。11. 世界終末を信じ、自分だけのサバイバルを確信。12. 「目的は手段を選ばず」を実行。13. 財政状態を秘匿。14. 暴力の気配がつきもの¹⁰⁾。

これらの項目をみると、越智も述べているように、大部分がオウム真理教にあてはまるといえよう。

8) 『同書』126～144頁。

9) 越智道雄『＜終末思想＞はなぜ生まれてくるのか』大和書房、1995年、155頁。

10) 『同書』157頁。

3 終末予言に関する考察

オウム真理教により、世界最終戦争（ハルマゲドン）という言葉は、きわめて有名になったが、本来このハルマゲドンという用語は、『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」にその由来が求められる。ところで、終末予言は、終末思想と予言という二つの構成要素によって成立している。

まず、終末論は、エスカトロジーという言葉の翻訳語であるが、これは、エスカトス（終末）+ロジーに分解され、元来、ユダヤ教とキリスト教の用語であった。このエスカトロジーという言葉は、1840年代に初めて用いられたというが、「終末がいつ来るかは、誰も、メシアやイエスすら知らない。それを知っているのは父なる神だけである」とされているように、ユダヤ=キリスト教的伝統においては、いくつかの解釈がなされてきた¹¹⁾。中でも、『ヨハネの黙示録』は、強烈なメシア待望と関連して終末思想が展開されている代表的な例である。

麻原も、この『ヨハネの黙示録』を自己流に解読している。もちろん、終末思想は、ユダヤ=キリスト教以外の宗教においても広汎にみられるものであり、仏教の末法思想はその一例である。さらに、オウム真理教のハルマゲドンは、田中公明も述べているように、インド仏教で最後に成立した密教聖典である『時輪タントラ』（カーラチャクラ・タントラ）に相当部分依拠しているのである¹²⁾。

『時輪タントラ』によれば、釈尊は、イスラム教の興起により仏教が滅亡の危機に瀕することを予知し、『時輪』の根本タントラとされる『吉祥最勝本初仏タントラ』を説いた。これを聞いた、シャンバラの国王スチャンドラ

11) 『同書』27～31頁。野村敏晴編『別冊歴史読本特別増刊⑥予言されたハルマゲドン』新人物往来社、1995年。

12) 田中公明『『時輪タントラ』とハルマゲドン』『大法輪』第63巻第5号、1996年、100～105頁。

田中公明『超密教時輪タントラ』東方出版1994年。

Tenzin Gyatso, the Fourteenth Dalai Lama; Kālachakra Tantra Rite of Initiation For the Stage of Generation, Jeffrey Hopkins, 1985.

は、本国に帰り、その教えを説いたという。シャンバラとは、ヒンドゥー教のヴィシュヌ派が説いた理想郷を指し、ヴィシュヌの9番目の権化がゴードマ・ブッダとされており、10番目の権化が、カルキと呼ばれる英雄神である。

『時輪タントラ』においては、総ての民衆を仏教徒にして、カースト制度を廃止する者が、シャンバラの王カルキであるとされ、25代目のカルキが、イスラム教徒との最終戦争に勝って、再び世界に仏教を宣布すると予言されている。麻原や村井は、この教えの影響を受けている。

ところで、日本においては、終末思想と予言は、五島勉による『ノストラダムスの大予言』シリーズが大ベストセラーとなったことによっても結びつけて受け取られた。的中率99パーセントとされるノストラダムスの予言によれば、人類は、1999年にその終末を迎えるというのである。この説は、阿含宗の桐山靖雄や幸福の科学の大川隆法をはじめとする、日本の新宗教もしくは新新宗教の教義に影響を与え、大川は、『ノストラダムス戦慄の啓示』を書き、『太陽の法』においては、今から500年前、予言者ノストラダムスは、東の国にて「太陽の法」が説かれるとき、自分の恐怖の終末予言はその使命を終え、新しい時代が始まると述べたとし、この「太陽の法」を説く救世主こそ自分であるとしている¹³⁾。

ついで、予言に関して、レオン・フェスティンガーの『予言がはずれるとき』の翻訳者である水野博介は、科学的な予知や予報を含めて、広い意味での「予言」が求められる心理的な理由を考察している¹⁴⁾。

水野は、『予言がはずれるとき』の原書（英語）においても、予言 (prophecy) や予知 (prediction) 予測・予報 (forecast) が、それほど区別なく使われているが、若干、ニュアンスの違いがあるとみなしている。宗教で

13) 大川隆法『太陽の法』角川文庫1990年3頁。

14) Leon Festinger, Henry W. Riecken and Stanley Schachter, *When Prophecy Fails: An account of a modern group that predicted the destruction of the world*, University of Minnesota Press, Minneapolis, 1956. L. フェスティンガー, H・W・リーケン, S・シャクター, 水野博介訳『予言がはずれるとき』勁草書房1995年, 380～384頁。

は、予言が重要なものとされることが多く、教義の中心部分に関わっている場合が少なくない。それは、一種のカリスマによってもたらされるものとされている。

しかし、多くの研究者が述べているように、予言が実際に当たったか否かの判断は、きわめて困難である¹⁵⁾。というのも、水野も述べているように、ノストラダムスの『諸世紀』程極端でなくても、予言そのものにあいまいなものや明確でない部分を含むものが多く、何か事件や現象が生じても、どの範囲まで、その予言が当たったか否かの判断は困難な場合が多いからである。

水野は、予言が的中したか否かの判断をめぐるあいまいさについては、外にも、予言的中の「基準」とその客観性という問題があるとする。これは、予言の「解釈」にかかわることでもあるが、水野が、予言をめぐる問題は、結局、種々の意味での社会的現実に関する正当化の問題に帰着すると述べているのは¹⁶⁾、筆者の多くの教団の調査結果とも一致する見解である。予言は、はずれる場合が多いが、その際にも説明する論理は、教団の教義に内包されているケースが多い。たとえば、神の試練であるとか、教祖や信者の力もしくは神に対する祈りによって、危機的状況から免れたという説明がなされるのである。したがって、明確な内容の予言を提示するのは必ずしも上策ではない場合も少なくない。

ところで、予言がはずれ、かつその説明が困難な場合には、認知的不協和の理論が有効である。この、フェスティンガーによって提示された、不協和理論においては、自己の行動や信念あるいは外界に関する認知の一貫性が問題とされる。二つの認知要素が不協和 (dissonance) な場合は、心理的に不快な状態が生じ、その不協和を協和 (consonance) の状態に近づけようとする、不協和低減への動機づけが生じる¹⁷⁾。

15) 志水一夫『大予言の嘘——占いからノストラダムスまで——』データハウス1991年。

志水は、『諸世紀』は『百詩篇集』と訳すべきであるとする。

16) 水野博介訳『前掲書』381～382頁。

協和的な関係に至る方法としては、認知要素の一方を変える、もしくは、不協和の重要性を減らす、さらには、認知全体における不協和の比重を減らす等の方法があげられるが、現実生活においては、不協和低減のためのいずれの方法もうまくいかないケースも少なからずある。

『予言がはずれるとき』の宗教グループも、その一例であり、この宗教グループの各メンバーは、予言を含むグループの教えを確信しており、かつその予言が完全にはずれ、客観的に否定のしようがないという状況下におかれた。この事実自体が、教団の教えの未成熟さを示しているともいえよう。

このような苦境に陥った宗教教団の多くは、予言がはずれた後になって、かえって布教活動が活発化し、その結果、大きな教団へと発展していくことがある。これは、まさしく初期の基督教の発展の歴史にもあはてまる部分があるといえる。筆者は、長年、イエスが死ぬまでは弱腰であった十二使徒らが、イエスの死後、死を恐れぬ強固な伝道者に変化した理由を考えていた。しかし、それは、認知的不協和の理論により、かなりの程度、解明が可能といえよう。

この逆説的な現象が起きるメカニズムについて、水野は、ある個人の信念に基づく予言が客観的にはずれたときでも、そのまわりに、なおその信念を信奉する人がいる場合、そのこと自体がその信念にとって協和的な要素になるとする。この場合の、不協和低減の方法は、同じ信念を抱く人を増やし、自分の信念と協和的な要素を多く得るといえるものである¹⁷⁾。

布教活動の結果生じた信者の増大は、基督教の歴史においては、イエスの復活という「共同主観」を信奉させるに至り、それは聖書にも書かれ、かつ多くの人に信じられることにより、「客観的現実」であるかのような効果を生ぜしめた。予言がはずれたことが契機となり、基督教は、人類史上最大の規模の信者を持つに至ったという解釈も可能である。

17) Leon Festinger, A Theory of Cognitive Dissonance, Evanston: Row, Peterson, 1957.

18) 水野博介訳『前掲書』370～371頁。

水野は、このように客観的には誤った現実が、多くの人々によって同様に受け入れられている事態を、社会心理学では「多元的無知」と呼ぶと述べているが¹⁹⁾、宗教現象の多くはその要素を内包しているといえよう。不協和理論は、ある文化において一見非合理的な信念が広く信じられ、事実上「客観的現実」となっている現象を裏づける理論とされるが、大多数の宗教は、少なくとも現代科学に比較するならば非合理的なわけであるから、この理論は、宗教現象の解明に広汎な有効性を持つといえる。

さらに、社会学者の、ピーター・L・バーガーは、キリスト教世界の「現実性」を維持するには、その内部の人々が、その世界がリアルと知覚される正当化によって、社会化がなされる社会構造を必要とすると述べている²⁰⁾。

バーガーは、メシア期待—至福千年説の複合形は、現在の苦難や不正を、輝かしい未来の到来によっておきかえることにより、一種の神義論を提示しているとする。しかし、このタイプの神義論は、経験上の背反には非常に傷つきやすいという弱点があるが、それに対しては、種々の知的・心理的方法により、経験的な反証を正当化しようとする述べている。

バーガーによれば、認知的不協和の心理学上の研究は、きわめて有効であり、彼は、『予言がはずれるとき』の事例研究の内容と、新約学者が「来臨の繰り延べ」と呼んでいるものとの驚くほどの類似性を指摘している²¹⁾。しかし、これはなんら驚くべきことではなく、キリスト教も新宗教も宗教であるからには、その教義や行動パターンに共通する部分がみられるのは、むしろ当然といえよう。

水野は、さらに、終末論的信念あるいは荒唐無稽な信念を抱くに至る要因について考察し、個人的資質としては、被説得性の高さ、想像力がより豊か

19) 『同書』371頁。

20) Peter L. Berger, *The Sacred Canopy—Elements of a Sociological Theory of Religion* (Doubleday & Co., N. Y., 1967)

ピーター・L・バーガー、藺田稔訳『聖なる天蓋——神聖世界の社会学——』新曜社1979年。

21) 『同書』104～107頁。

(空想的、誇大妄想的)といったことをあげている。そして、オウム真理教の信者の場合には、権威ある人に服従し、そうでない人に攻撃的になる、権威主義的な人格の持ち主が多い可能性を指摘している²²⁾。

しかし、水野は、より一般的な心理的メカニズムが働いている可能性があるとし、その一つを、やはり認知的不協和理論で説明している。すなわち、何らかの理由で、強い恐れ(あるいは不安)をいただいているが、それに対応する具体的な認知がない場合には、強い不協和が生じるが、それを低減するには、恐れを正当化するような具体的な認知を与えることが有効なのである。このような理論からすると、終末論的な予言が信じられる一つの心理的要因として、漠然としたものにしろ、なんらかの恐怖や不安が存在していることがあげられる²³⁾。

さらに、もう一つの重要な現象としては、予言の自己実現(成就)があげられる。それは、予言が明示されたことにより、その予言を達成しようと意識的に努力するが故に、それが現実化することを指す。この現象に関しても、認知的不協和の理論による説明が可能である。ある人物が、何らかの予言を受け、そのことを強く意識し、その認識と自分の現状を比較し、その間に大きな懸隔がある場合には、多大の不協和を感じる。その不協和を低減するため、そのギャップを埋めるために、何らかの努力もしくは行動をとるケースは少なからずある²⁴⁾。

この予言の自己成就是、社会学者のロバート・K・マートンにより、より広い文脈で展開されている。すなわち、彼は、ある状況についての非現実的な定義であっても、それが一旦真実であると人々に見なされると、そのため現実的な結果が生じるという、すでに社会学者のW・I・トーマスが提示した命題(トーマスの公理)「もしひとが状況を真実であると決めれば、その状況は結果においても真実である」の典型的な事例として位置づけている。

22) 水野博介訳『前掲書』373頁。

23) 『同書』374～375頁。

24) 『同書』384～385頁。

このことは、社会的現実はずし人間に外在する客観的なものではなく、ある社会内の人々が、共同幻想もしくは共同主観をもてば、それが現実となり、それに対応してとられる行動は、現実の結果を生み出すことを示している²⁵⁾。

この現象も、宗教現象において、広汎にみられるものであることはあらためていうまでもない。マートンは、人間の場合は、予測をしたことが予測の対象に影響するという予測の再帰性がみられると述べている。そして、水野は、現代の科学技術の発展は、予言の影響が自然界にまで及びうる状況になっているとして、すべからく予言を実現させようとする傲慢さをもつに至った例として、オウム真理教事件をあげている²⁶⁾。当論文においては、これらの理論を前提としてオウム真理教事件を考察するが、その際、なぜに多くのまじめなエリートを含む人々が、麻原の指示のもとにかくも恐るべき事件を起こしたかという問題の解明のために、さらに社会心理学の理論を検討する。

4 マインド・コントロールと権威への服従

マインド・コントロールという用語は、統一協会員の体験を有する、ステューヴン・ハッサンによる『マインド・コントロールの恐怖』という本によって日本に広く流布するにいたり、かつては主として統一協会に対して用いられたが、最近ではオウム真理教によって、より一層広汎に用いられるにいたっている。

ステューヴン・ハッサンも、不協和理論の観点から、マインド・コントロールのメカニズムに関して説明しているが、その説明に不備な部分があることは、西田公昭も水野博介も指摘している。水野は、他者の態度を巧妙に変

25) Robert K. Merton, SOCIAL THEORY AND SOCIAL STRUCTURE, The Free Press, U. S. A. 1957.

ロバート・K・マートン, 森東吾他訳『社会理論と社会構造』みすず書房, 1968年, 382~387頁。

26) 水野博介訳『前掲書』386頁。

える方法として、人に何らかの自発的と思われる行動をとらせる（選択させる）ように、仕向け、そのことにより不協和の理論が説明するようなメカニズムが働くようにし、その後は自動的に態度が変容するのを待つという手法をあげている²⁷⁾。

ある人物が、いったん行なった行動とその人の本来の信念とがくいちがっていると、大きな不協和を感じるが、いったんとった行動は取り消すことができないので、不協和を低減させるには、主として自分の信念を変化させることによる場合が多い。すなわち、行動から信念へという方向づけを行なわせることより、ある信念を強固に保つようにするわけである。

シンガーは、マインド・コントロールのための条件として以下の六つをあげている。1. 信者をコントロールするか変化させる計画があることを気づかせない。2. 時間と物理的環境（接触と情報）をコントロールする。3. 無力感・不安・依存心を起こさせる。4. 古い行動や態度を抑圧する。5. 新しい行動や態度を吹きこむ。6. 論理の閉鎖回路を打ち出す²⁸⁾。

さらに、シンガーは、生理的説得術に関する部分で、カルト指導者は、以下の二種類の説得の方法を組み合わせて用いると述べている。

1. 予め計画された体験や修行を信者にさせることによって、予想できる肉体的反応を信者に起こさせてから、その反応を指導者たちに有利に解釈してみせる。

2. 心理的圧力や心理的操作を信者に加えることによって、特定の反応を行動面や感情面で起こさせてから、カルトへのいっそうの依存を強めるようにその反応を利用する²⁹⁾。

シンガーは、ある一定の生理的・心理的結果を生み出すことがわかってい

27) 『同書』375～376頁。

西田公昭『マインド・コントロールとは何か』紀伊国屋書店1995年。

28) マーガレット・シンガー、中村保男訳『前掲書』99頁。

29) 『同書』182頁。

30) 『同書』185～199頁。

る行として、以下の五種類の修行、深呼吸、反覆動作、食事内容と睡眠の長さ
とストレスの量の変化、肉体操作、くつろぎが生む不安、をあげている³⁰⁾。

これらの項目は、オウム真理教のようなヨーガを基盤とした教団において
は、相当部分当てはまるといえよう。

ところで、従来のマインド・コントロールの枠組を一部解体再編し、かつ
拡大した研究者として、上田紀行があげられる³¹⁾。上田は、宗教はマインド・
コントロールだという言説に対して、多様な生き方や解釈の可能性をひとつ
の恣意的な型にはめ込み、そのみが真理であり、かつある行動規範のみが
正当であると信じさせる構造が、マインド・コントロールであるならば、わ
れわれの日常生活にそれは遍在しているとする。

さらに、宗教におけるマインド・コントロールは、誰が誰に対してするか
という問題に関して、宗教教団内の構造を問題にする。そして、宗教が社会
問題を引き起こしたときに、悪い教祖と、マインド・コントロールされた、
被害者である信者という二元論が、ステレオタイプ化されて流布している構
図であるとして、その再検討の必要性を指摘している。

上田は、このような構図がすべての場合に当てはまるとは限らず、さらに
そうした構図が当てはまるようにみえる場合でも、実際には、より複雑であ
り、教祖もまた、マインド・コントロールされる場合があることを指摘する。

教団とは、劇場空間に近い構造を持った存在であり、教祖は、信者の期待
に応えるよう行動しなければならず、その意味では、マインド・コントロ
ールされている側面もあるとする。

上田は、したがって、教祖も信者も、教団というシステムが要求する方向へ
の誘導を受けており、双方がコントロールされているという見方もできると
する。信者が、教祖をマインド・コントロールする場合もあるし、信者と教祖
の双方がマインド・コントロールし合うという、共犯関係が存在しているこ

31) 上田紀行「教祖もまた洗脳される——マインドコントロールの構造——」『仏教
No. 33 特集＝洗脳と回心』1995年、2～15頁。以下同論文による。

とも多いことを認識することの必要性を述べているのは、重要な指摘である。

上田は、宗教世界・日常世界のいかんをとわず、我々ひとりひとりが、マインド・コントロールの受け手であるのみでなく、加えている側でもあるという自覚を持つことの必要性を述べている。マインド・コントロールという言葉が、恐ろしく単純化され、宗教というマインド・コントロール、自由な日常といった陳腐な二元論に陥りがちなことこそ、硬直した現代のマインド・コントロールの構造の反映であると述べているのは、慧眼といえよう³²⁾。

ところで、オウム真理教事件において、教団関係者が多くの殺人を犯すに至った要因を分析するにあたって、有効であると思われる研究としては、スタンレー・ミルグラムによる『服従の心理』があげられる。

ミルグラムは、人間行動を形づくる上での服従の役割を認識しなければ、重要な意味をもつ行動の多くが了解不能となるとする³³⁾。命令のもとになされた行為は、自発的な行為と心理学的に根本的に異なった性格をもっており、盗み、殺人、暴行を忌み嫌っている人間でも、権威から命令されると、これらの行為を気軽にやる場合も少なからずある。

ミルグラムの実験は、アイヒマン実験とも呼ばれているが、それは、1963年のハナー・アレントの著作『イェルサレムのアイヒマン』に関して起こった論争と関連している。アレントは、アイヒマンを極悪なサディストと見なそうとする検察当局の努力は根本的に間違っており、彼は、職務を果たしただけの平凡な官吏に近いと論じて、さんざん嘲笑された。

しかし、ミルグラムは、以下のような実験を行なうことにより、アレントの見解には、かなりの正当性があることを実証した。記憶と学習の研究に参加するために、二人の人間が心理学実験室にくる。一方が「教師」、もう一

32) より詳細な考察としては、上田紀行『宗教クライシス』岩波書店、1995年参照のこと。

33) Stanley Milgram, *Obedience to Authority: An Experimental View*, Harper & Row, Publishers, Inc., New York, 1974 S. ミルグラム、岸田秀訳『服従の心理——アイヒマン実験』河出書房新社1989年、以下同書による。

方が「生徒」に指定される。実験者は、学習に対する罰の効果を研究すると説明し、生徒は一室に案内され、椅子にすわり、手首に電極をつけられる。単語のリストの学習において、誤りを犯すたびに彼に電気ショックが与えられるが、その強度は、15ヴォルトから450ヴォルトまでだんだん増していくことになっている。送電器には、「かすかなショック」から「危険—すごいショック」にまでわたる言語表示もついている。

実験の本当の眼目は、教師にあり、生徒はサクラである。教師は何も事情を知らない被験者であり、生徒は、芝居をするのであり、実際には、ショックは与えられない。この実験の目的は、人間が、明白な道徳的命令に直面して、いつ、どのように権威に反抗するかを見出すことにあった。

実験の結果は、予測に反し、被験者の過半数が「危険—すごいショック」とされる、450ヴォルトまでのショックを与えた。ミルグラムは、多くの人々は、自分がしていることをいいことだと思わなくても、実験を続けることから、個人の道徳感覚が及ぼす力は、われわれが信じているほどには効力がないとする。道徳的要因は、情勢と社会的条件を組み直すことにより、意外と容易に握りつぶすことができるというのである。

従順な被験者における、もっとも一般的な思考調整は、自分の行為の責任が自分にあると思わないことである。合法的権威である実験者に、すべてをまかせ、自分の責任を放棄する。そして、権威に服従している者の道徳的関心は、権威が自分に期待していることをどれだけうまくし遂げるかという点に向けられる。

この場面に働くもう一つの心理学的力は、「逆擬人化」とでも呼ぶべきもので、本質的に人間から発し、維持されている力に非人格的な性質を付与し、人間的要因は舞台裏に退いてしまうというものである。さらに、実験中のほとんどの被験者は、自分の行動を、科学的真理の追求という、社会に役立つ道徳的な、より大きな目的の一環とみなしている。しかし、ミルグラムも述べているように、ある行為を大きな目的に従属させ、それが人間に及ぼす影

響を忘れることが、きわめて危険なことは、オウム真理教事件をみても明らかである。

さらに、自分が邪悪な行為の連鎖の途中の一環に過ぎず、行為の最終結果から遠く離れているときは、心理的に責任をより無視しやすくなる。ミルグラムは、行為全体の責任を負う者がなくなることが、近代社会の社会的に組織された悪のもっとも一般的な特徴であるとしている。

ついで、ミルグラムは、人間世界の解釈の仕方を支配できたら、その人の行動を支配できたも同然とする。人々には、合法的権威が提示する行為の定義を受け入れる傾向があり、従者は権威の場面の定義を受け入れるため、行為は自発的に行なわれる。さらに、代理状態の重大な結果は、個人が自分を指図している権威に対しては責任を感じるが、権威に命じられた行為の内容については責任を感じなくなり、道徳は、個人が権威に対する責務をどの程度果たすかという点にかかわるようになることにある。人間が、自分の行為に責任を感じるためには、その行為を自己から発したものと感じなければならない。ミルグラムは、文化は、権威から発する行動に対する内的抑制を教えこむことにほぼ全面的に失敗しているが故に、権威に発する行動は、人類の生存にとってきわめて大きな危険となっていると述べているのは、重要な指摘といえよう。

ミルグラムは、G・W・オールポートは、この実験のことを「アイヒマン実験」と呼んでいたが、自分の研究は、主として命令に忠実な普通の人々が遂行する、普通の日常的破壊行為を対象としていると述べている。ミルグラムは、ヴェトナム戦争で普通のアメリカ人が行なった非人間的行為にふれ、彼らもまた、権威によって変身させられ、自分の行動に対する個人的責任感を放棄していた人たちであったと述べている。

この実験によって明らかになったのは、人間性を捨て得る人間の可能性、人間が大きな制度的構造のなかに自己の人格を投入させたときに必ずそうなる不可避性であるとする。そのため、人類の生存の可能性はおびやかされて

いると、ミルグラムはみなしている。

この実験において反抗した被験者は、生徒の苦しみの責任が第一に自分自身にあると見ていたことが分かった。服従と不服従には、複雑な人格基盤があることは確かであろうが、それが明確には解明されていないこともまた確かである。そして、ミルグラムは、結論として、今世紀の社会心理学は、個人がいかにかふるまうのかを決定するのは、彼がどんな種類の人間かということより、どんな種類の状況におかれているかということであると述べている。

したがって、オウム真理教事件の解明においても、信者らがいかなる状況におかれていたかを把握することが重要な要件といえる。しかし、それは、マスコミや多くの研究者によって一定程度共有された情報となっているので、あえてくりかえして述べることはせず、以下、次節においては、終末予言に対象を限定して、その概略を述べることにする。

5 オウム真理教の終末予言

オウム真理教は、マーシャ・ルーディンの提示している破壊的カルトの項目をほぼ全部備えている、アメリカでも珍しい集団である。以下、その中で、主として予言、中でも終末予言の内容を検討することにする。

宮坂宥勝は、オウム真理教の終末論、ハルマゲドンに関する主な出版物をあげているが³⁴⁾、以下その中で代表的なものの内容を述べることにする。麻原は、『イニシエーション』(87年8月刊)において、日本は、欧米との経済摩擦を契機として、しだいにじり貧の生活に入っていくが、その本当の口火が切られるのは1990年であると述べている。

しかし、93年までにオウムが、世界に一つないし二つの支部を持っていたら、この予言ははずれるが、さもなければ、93年に再軍備となり、99年から2003年までに確実に核戦争が起きると述べている。

34) 『仏教・別冊 No. 8 オウム真理教事件——宗教者・科学者・哲学者からの発言——』法蔵館1996年、32～33頁。なお、以下のオウム真理教の本はすべてオウム出版から出版されている。

大戦争が起きても、成就者は、意識をアストラル・ボディーに移し変えて、アストラル世界に逃げることができるが、他の人間は困るので回避に努力するべきであるとする。成就者は、肉体は滅びても、好きな時と場所に再生が可能とされている。

人々は、より現実主義的となり、マスコミは、食欲・性欲・スポーツという三つの享樂しか与えなくなり、精神的な面を徐々に制約していく。政治的には、国家・警察の力が増大していき、国民は徐々に同じ考え方に統一されていく。円高が進み百円を切るようになり、91年から2年くらいの間には農作物の輸入自由化が行なわれ、政治的に右傾化していくとする。

さらに、『マハーヤーナ』誌において、No. 8 (88年4月刊) から「大宇宙占星学」についての連載が開始されている。それは、麻原が、マニクラチャーというアストラル世界のグルから伝授されたもので、その先駆的形態は、諸葛孔明が用いた「奇門遁甲」に見出すことができるという。

その手法は、太陽から冥王星までの惑星が人間に与える吉凶作用を算出し、グラフにして運勢を占うというものである。十一のグラフは、それぞれの惑星の吉作用・凶作用の強さを表わし、一つは、「個人の運勢」、もう一つは、「星の象意における吉凶」を見るという。良い時期に動けば、良い結果となり、悪い時期に動けば悪い結果となるが、功德によって左右されるという「カルマの法則」も働くという。

これによれば、地震のような天変地異の予測すら可能であり、西洋占星学と異なる以下のような諸特徴を有している。

1. 二種類の吉凶の見方があり、「立向」とは、人がある場所から他の場所に移動するとき利用するもので、その日時に、その方位に移動することの吉凶を各惑星の位置関係から割り出すものである。これに対し、「座山」は、移動を伴わないものに使われ、ある日時に何が起こるかということを知ることができる。

2. 実際の惑星の動きと位置を、コンピューターによって高速解析し、各惑

星の三次元的な位置関係を、分析する。

3. 麻原が、アストラル世界から持ち帰った特別な変数を、惑星間の角度が織り成す吉凶の度合いにかけることによって、より一層正確な吉凶を知ることが可能にした。なお、特別な資料は、惑星の象意の検討等に用いている。

4. 大宇宙の巨大なエネルギーを考慮に入れている。

5. 「天の時」「地の理」「人徳」「インスピレーション」により使いこなしているが、これらは、正しい修行をした者しか得ることができないという。

さらに、No. 16 (88年12月刊) においては、1999年8月1日には、人類滅亡の危機が訪れるとしている。この日は、太陽と他の星との間に凶角が集中している。しかし、木星と金星の角度が最大吉なことは、「信仰心のある者は、犠牲を払った後平和を得る」という意味に取ることができるとする。

麻原の予言のメカニズムは、以下のような三つの方法に基づいてなされ、95パーセントの確率で現実化されているとする。1. コーザル世界にある宇宙神素より、直感によりデータを得る方法であり、狂いはまずないとされる。2. アストラル世界へ飛んで、ヴィジョンを見て推測する方法であり、若干のズレが生じる。3. ジュニアーナ・ヨーガによるもので、今の現象界の動きを徹底的に解析し、データをインプットしてから、予言を引き出す方法である。

天皇の崩御の時期に関して、麻原の予言が当たらなかった理由として三つの要因をあげており、この事実により、未来というものも決定論ではなく、コーザルが変えられれば、変更可能であるとする。

しかし、『トワイライトゾーン』（88年1月号）においては、1999年8月1日には、やはりハルマゲドンが勃発し、アメリカ・ソ連・中近東を中心とするイスラム諸国・日本が正面切ってぶつかり合う、激しい戦争となるが、しばらくの間核兵器は使われず、2003年に、核兵器による決定的な破局が訪れるとしている。

ついで、『滅亡の日——麻原彰晃「黙示録大予言」の秘密のベールを剥ぐ——』（89年2月刊）において、シヴァ神の命を受けた麻原は、CSI（コ

スミック・サイエンス・インスティテュート)のメンバーと共に解読作業に取りかかったとしている。

それによれば、ヨハネをアストラル世界に連れて行ってヴィジョンを見させたのはシヴァ神であり、麻原とヨハネのズレは、ヨハネがクリスチャンであるために、キリスト教の枠からはみ出ることができなかつたために生じたという。

その内容は、力でよい世界をつくる、タントラ・ヴァジラヤーナの世界を肯定しており、シヴァ神は、神に対して強い信仰を持つタントラ修行者が、諸国民を支配することを望んでいるとしている。

全体的に見ると、『旧約聖書』には、人間が神から遠ざかっていくプロセスが、『黙示録』には、一部の人間が神に近付いていくプロセスが書かれているとする。

麻原は、中世以降のキリスト教には疑問を感じるが、それ以前は真理であったとみなしている。そして、『血の報復』とは、人類滅亡の時代を指し、その時、真理のために死をいとわない多くの人々が生じ、神は邪悪な者たちに血の報復をするという。

噴火は神の怒りであり、人間の悪業が満ちてくると、神は火元素を操って火山を噴火させ、部分的にカルマ落としをするが、自然の噴火でカルマを落とし切らなかつたとき、神は人工的な火を使ってカルマ落としをさせる。それが、ハルマゲドン(人類最終戦争)であるとする。

赤い龍とは共産主義国を意味し、ソ連は中国を配下にしようとするが成功せず、2004年に崩壊し、中国も2004年末から2005年末には滅亡すると予言している。

さらに、救世主がこの世に現われ、超人類が誕生することが暗示されているとする。これに類似した予言は、酒井勝軍^{かついさ}によってもなされており、彼は、「人類は今世紀末のハルマゲドンで滅亡する。生き残るのは神仙民族だけだ。その王は日本から出るが現在の天皇とは違う。」と、述べたという。

神仙とは、「修行の結果、神通力を得た仙人」のことであり、ノストラダムスも「新しい種族」が生まれることを暗示しているとする。ヒトラーも、今世紀末の大破局が「救いの超人や神人を生み出す」と述べているという。これらからも、麻原は、神の怒りによる大破局を、神を心から信じる超人類のみが乗り越え、新しい世界を築くものと推測していることが分かる。

癌、海洋汚染、放射能汚染、旱魃、エイズ、石油危機等が生じることも予言されている。麻原は、1995年の選挙でアメリカ大統領となる人物と、その時点でのソ連の書記長が、ハルマゲドンまで人類を導いていくという予言をしている。その後に、ヨーロッパが残るが、ヨーロッパが滅亡した後で超人類が登場してこの世を統治し、昇華し、最終的には、ラトナサンバヴァの世界（宝生界）に聖なる者たちが到達していくとする。

つぎの、『滅亡から虚空へ——続・滅亡の日——』（89年3月刊）では、『ヨハネの黙示録』のハルマゲドン以降に関する予言の解説を行なっている。1999年に、『わが闘争』の発禁処分が解けることから、ハルマゲドン後に、ナチスが甦える可能性をも示唆している。

転輪聖王として出現する救世主は、カルキを類推させる。優しい神々の手ではどうしようもなくなった世界を、恐怖神が破壊をつうじて救済する時代がくるが、このようなカルマの精算のための最後の戦いは、ゾロアスター教の未来予言とも一致する。

さらに、新しい世界とは、この宇宙が壊滅した後に出現する「虚空の楽園」、すなわちラトナサンバヴァの世界である。宇宙は、創造・維持・破壊・虚空というサイクルで展開しているが、今や虚空の時代を迎えたとする。この時代は、創造→破壊→魂と世界の二分化→創世というサイクルで説明すると、魂の二分化から創世の途中に現われる状態であるという。この時代は、現象界とアストラル世界との区別のない状態である。

麻原は、現在既に魂の二分化が始まっており、多くの者が精神的に墮落している中で、一部の人間は正しい生活をし、修行をしながら、真摯に魂の向

上を考えているとする。麻原のグルであるシヴァ神は、ヒンドゥー教のシヴァ神とは違い、それはアフラからの転生でもあり、オウムの修行のタントラ・ヴァジラヤーナのもとのマントラは、ゾロアスター教から出てきていると述べており、その影響の強さを示している。

人類滅亡のシナリオとは、一時的な享楽にふける魂の持主が破壊され、超人類が現われて彼らが生き残るといふものである。神が、大きな戦争の首謀者となる時代は近く、大破局は避けられず、神に帰依して魂の向上を図り超能力を身に付け、神々の陣営の一員として邪と闘うなら、超人類としての幸福が約束されるという。

ついで、『ノストラダムス秘密の大有言』（1991年12月刊）において、フランスまで行って、ノストラダムス協会のリーダーであるショマラと会った麻原は、以下の部分が気になっていたと述べている。「第四章三十一 真夜中、高い山の上に月 ただ一つの頭脳を持つ新しい賢人がそれを見た 弟子を通じて不死になることを訓戒する 目は南に、手は内奥、体は火に」（オウム真理教翻訳チーム訳）

麻原は、この賢人とは、自分のことを指していると考えている。もう一つ麻原が、気にかかっていたのは、詩の以下の部分である。「第一章九十一 神々が人類に姿を現わす 彼は大きな戦争の首謀者となる 神の前に静まり返って見える軍事と攻撃 左手に向かってもっと大きな衝突を起こす」（オウム真理教翻訳チーム訳）

さらに、麻原は、帰国後、以下の部分に注目した。「第一章四十八 20年間の月の統治の後 7千年間、別の者が王国を支配する 太陽が月のうんざりした日々の責任を引き受けるとき わたしの予言は成就し(わたしの詩は)それ以降なくなる」（オウム真理教翻訳チーム訳）

この部分は、ノストラダムスが、後世の人が何らかのアクションを起こすことを望んでいた個所であると考えた麻原は、反射光のように実態のない宗教の後、太陽のように未来を変える宗教の登場により、この予言が成就した

後では、その他の予言している事象は起こらなくなることを示しているとみなしている。

ところで、麻原は、人類の終末を予言しているとされている『諸世紀』第十章七十二節を、以下のように翻訳している。「1999年7の月 恐怖の大王が天からやってくる 神の御使いモーゼが甦る 未来の前に軍神がボン教の予言にしたがって統治する」

この部分から、麻原は、破局はまちがいなくくるが、その中で一部ではあるが生き残る人々がいる。さらに、ノストラダムスの予言が、それ以降無効となるような世界を主体的に築いていくよう努力するべきであると自分は考えるにいたったと述べている。

麻原は、自分がキリストであることを宣言した後³⁵⁾、オウム真理教は、唯一の正当な聖なる流れの教えを奉ずる集団であることが明示されているとする。麻原は、ノストラダムスが予言した救世主であり、末法におけるマイトレーヤーであることは、酒井勝軍や出口王仁三郎によっても予言されていたとする³⁶⁾。このようなメシア意識は、多くの新宗教の教祖においてもみられるもので、ごくありふれた現象である。

さらに、麻原は、1992年10月から11月にかけて行なわれた全国の各大学での講演において、従来とは異なる以下のような予言をしている。「これから2000年にかけて、筆舌に尽くし難いような、激しい、しかも恐怖に満ちた現象が連続的に起こる。日本の国土は核によって荒れた大地と変わる。その時期は、1996年から98年1月にかけてである。日本を攻めるのは、アメリカを中心とした連合国。大都会においては十分の一くらいの間人しか生き残らない。十人中九人は死んでしまう……。」³⁷⁾

35) 麻原彰晃『キリスト宣言——キリストの教えのすべてを明かす——』オウム出版1991年12月

麻原彰晃『キリスト宣言 PART 2-再臨・裁き・終末』オウム出版1991年12月。

36) 麻原彰晃『THE 説法Ⅱ——初公開！——タントラ・ヴァジラヤーナ最高の教え』オウム出版1992年10月。

AUM PRES のメンバーは、現実に世界で進行しつつある政治的、経済的、軍事的、民族的動向から判断しても、確かに人類が第三次大戦の破局へと向かっていることが実感され、この戦慄すべき未来予言が、より現実味をもってくるとしている。さらに、麻原の予言適中率は98パーセント以上とされているうえに、この今世紀末の大破局は、『聖書』や伝典、さらにはノストラダムス等の著名な予言者によってすでに予言されており、人類にとって避けることのできない「洗礼」であるとみなしている。

このような大破局に直面しつつある者に対し、麻原は、以下のような「緊急メッセージ」を出している。「成就せよ！ それは君たちがハルマゲドン（人類最終戦争）を超越する唯一の道だ。……救済される者は救済されるし、救済されない者は救済されないのだ」³⁷⁾

この成就とは、修行により、「超人」へと進化し、人間をはるかに超えた肉体、精神、霊性を獲得することとされる。オウム真理教の成就者が、大破局の際に予想される種々の外的衝撃等に対して、常人以上の強靱な耐久力を持っていることが科学的に証明されているという。オウム真理教の実験は、世紀末の大破局を乗り越えて、新たな時代を創造することのできる可能性を、現実のものとして明確に提示しているとする³⁸⁾。

より具体的には、これからの日本は、二つの洗礼を受けることが予言されている。一つは、洪水を中心とした、水による洗礼、要するに天変地異によるものであり、もう一つは、戦争による災禍である。

世界的にみると、アメリカの権限は、1998年の2月からなくなりだし、2000年には、完全に、世界の盟主としての力をなくしてしまおう。そして、来世紀をしょってたつのは日本であるという予言が、多くの人によってなされているとする。

37) 麻原彰晃『麻原彰晃、戦慄の予言——君は人類最終戦争を生き残れるのか!? ——』オウム出版1993年3月、1頁。

38) 『同書』2頁。

39) 『同書』3頁、以下同書による。

ノストラダムスによれば、六人の最終解脱者の登場によって、平安な移行が可能となるとされている。しかし、この最終解脱者が出ないと、日本は壊滅的な状態に陥る。このような事態に対する集団的な防御としては、水中都市建設の準備をするが、個人的には、瞑想に熟達することと戒律を守ることによって、できるだけ高い世界へ至ることが大切であるとされている。さらに、『転輪獅子吼経』にあるように、山に逃げ込んだ者は生き残るという。

そして、ハルマゲドン後に日本に登場する救世主とは、麻原のことであることが明言されているとする。さらに、使われる兵器は、核兵器・生物兵器・化学兵器というABC兵器であるという。その他に、一種のクー・デタが起き、軍事政権が登場するともいっている⁴⁰⁾。

麻原は、オウム真理教の修行者は、核戦争を生き残れるだけの強靱な肉体を持っていることが科学的に証明されたとして、科学的実験の結果、1. 酸素消費量の減少、停止。2. 脳波がアルファ波、シーター波優位となることと、そうなることのメリット。3. 外的刺激に対するショックの減少が修行者に生じ、救済されることが証明されたとしている⁴¹⁾。

さらに、『麻原彰晃、戦慄の予言第2弾』においては、第三次世界大戦において、アメリカはプラズマ兵器を使用すると述べている。これは、「プラズマ反射衛星砲」というが、これに対して、ロシアは、「恒星反射砲」を用意している。このような状況により、地球人類の三分の二が消滅する可能性があるとする⁴²⁾。このような、プラズマ兵器を用いて行なわれる戦争で生き残る道は一つしかなく、自分自身の肉体からプラズマを発生させることによるとする。ところが、オウム真理教の修行によって、プラズマを発生することができるようになり、肉体が防御でき、第三次世界大戦から守られるようになるというのである⁴³⁾。

40) 『同書』120頁。

41) 『同書』176～177頁。

42) 麻原彰晃『麻原彰晃、戦慄の予言第2弾!!—この恐怖の世紀末—君は生き残れるのか!?!—』オウム出版1993年7月、12～26頁。

そして、ノストラダムスの『諸世紀』第五章五十三節「太陽の法と金星が争う 予言にあった（予言されていた）魂を支配者にする二つのどちらも理解しない（お互いに理解できない）偉大なメシアの法は太陽に由来する」⁴⁴⁾

（オウム真理教翻訳チーム訳）によれば、太陽の法と金星の法が争い、太陽の法は、救世主によって保持されるという。

この太陽の法とは、仏教のカルマの法則であり、金星の法とは、欲望、快楽、金銭欲の追求である。フリーメイソンは、宗教を破壊し、自由・平等・博愛を唱えた結果、欲望を満足させ、経済を土台とした国家運営のもとに、金星の法を実施させたとする⁴⁵⁾。

麻原は、93年から97年が山場であり、97年にハルマゲドンが起きると予言している。そして、ノストラダムスの「偉大な教祖は、教団を拡大させようと思念すると。しかし、大きくならない」という予言は、麻原が教祖となっている教団は、ある段階まで大きくならないが、ある時期からは、一方の陣営の中心を担うことにより、爆発的に拡大すると予言しているとする。ハルマゲドンは、長く続くが、人間が本当に永遠の生命を得るには、阿羅漢に到達した魂の持ち主となることであるとしている。

麻原が、自分を指していると考えている「武人灌頂王」は、ハルマゲドン前後に現われるとされ、地上における宗教戦争は、最終的には、仏教対キリスト教の対決になり、ハルマゲドンは、1997年から2000年にかけて激しく起きるとされている。ところが、オウム真理教の成就者は、過酷な大戦を生き残ることができる。彼らは、神による進化のふるいにかけて選ばれた魂であり、破局を生き残るために変異し進化し、新たな理想社会を建設することを予言された魂であるというのである。

ところで、地下鉄サリン事件の直前に発売された『日出づる国、災い近し』

43) 『同書』20～22頁。

44) 『同書』25頁。

45) このような、フリーメイソン観は、正確なものではなく、その概要を知るには、吉村正和『フリーメイソン』講談社現代新書、1989年が適している。

は、きわめて注目すべき内容を含んでいる。まず、麻原は、阪神大震災は、天災ではなく、地震兵器による攻撃であるとする⁴⁶⁾。しかも、この地震は、9日前の1月8日のラジオ放送において「95年、日本は地震に襲われる。一番危ないのは神戸」という内容が、全国に向けて放送されていたという⁴⁷⁾。さらに、「これから2000年にかけて、筆舌に尽くし難いような、激しい、しかも恐怖に満ちた現象が連続的に起こる」と予言している⁴⁸⁾。

95年1月1日のオウム真理教ラジオ放送で、麻原は、予言の四つの方法をあげている。第一のパターンは、他人の予言書を解読するもの。第二のパターンは、社会現象をいろいろな形でデータとして入れ、それを数学的に処理することによって、未来を分析するという技術。第三のパターンは、他の現象と、過去の事象との経験的類推から未来を予知する。オウム真理教の大宇宙真理占星学、気学、奇門遁甲、子平会海等の過去から伝わっている予言法。第四のパターンは、神通力によって未来を見るという方法である⁴⁹⁾。

そして、95年に選挙が行なわれるとしたら、自民党が大勝するという予言をしているが、これが、まったくはずれたのは衆知のごとくである。経済に関しては、円高が徐々に進むとしているが、これもはずれている⁵⁰⁾。このように、ごく近い予言さえはずれているのは、麻原の予言の的中率が自称しているほど高くない有力な証拠といえよう。

しかし、麻原は、「深層心理予言学」により、個人、国家の未来および個人の来世というものを完璧に分析し、それについての対処法まで、出すことがまもなくできるようになると述べている。そして、すべての運命学を完全にデータベース化して、コンピューターによって占えるような状態にして、それにより、信徒の種々の問題についても解決策を与えるシステムが完成すると述べている⁵¹⁾。

46) 麻原彰晃『日出づる国、災い近し』オウム出版1995年3月2日、1頁。

47) 『同書』1～2頁。

48) 『同書』10頁。

49) 『同書』16～17頁。

50) 『同書』22～23頁。

さらに、95年は、オウム真理教にとっては、外的な圧力は弱められ、大発展の年になるとしているが、これもまったく反対の事態が生じたのは衆知のごとくである。

ついで、必ず戦いが起き、大量の殺戮が起きる。日本の外交は、95年を通してアメリカ依存型から変化しないが、95年の終わりから一気に日本は大きな変化へといざなわれる。この変化は、ハルマゲドンそして、第三次世界大戦へと動いていくきっかけの一つとなるとしている⁵²⁾。これは、早川メモによれば11月にオウム真理教は、一種のクー・デタを計画していたのであるから、予言の自己実現により、当たる可能性があったが、3月20日の地下鉄サリン事件を起こしたことによって、やはりはずれた。

ところが、「占星学で予測する95年」という1月8日の放送において、信州大学大学院で宇宙測地学を専攻している高橋英利は、地震占星学により、94年11月18日の月食図を元にして計算したら、「神戸の辺りに危ない地点がある」と出たと述べている⁵³⁾。これは、事実であるとしたら予測が的中したケースであるが、予言というよりは、科学に基づく予知に近いものという可能性がある。

ところで、最終戦争で生き残る方法について麻原は、仏教経典には「最終戦争は起きる。そしてそこから逃れた人がそののち、しっかりと法則を守り、戒律を守り、新しい人類を築く」と説かれており、さらに「山に逃げた人が助かる」しかも、「岩間の陰等に隠れた人が助かる」と書かれていると述べている。

麻原は、オウム真理教の道場が富士山周辺にあるのも、いかなる兵器でも

51) 『同書』32～34頁。

52) 『同書』37～38頁。

53) 『同書』80頁。

教団内における活動および教団の教義等については、高橋英利『オウムからの帰還』草思社1996年参照のこと。それによれば、地震占星学とは、高橋たちが開発したプログラムで、地震占星術の伝統的な方法を用いて日付ではなく場所を割り出せるように工夫したものによって得た結果であったという。『同書』191頁。

そう広範囲に影響を与えるものではないが故に、それだけでも出家者が生き残る確率は高くなるためと述べている。都会から離れた空間での食料と医療の確保、さらにその空間に耐え得る精神力により生き残れるとする⁵⁴⁾。

ついで、死の灰に対しては、教団で開発した「コスモクリーナー」、さらには、シェルターにより核戦争を生き延びることができるとしている。そして、早川紀代秀は、アメリカやロシアはシェルター化が進んでいるのに対して、日本は、地下鉄の霞ヶ関駅のみがシェルター化できるのではないかとされているほど、貧弱な対応しかできていないことを指摘している⁵⁵⁾。したがって、オウム真理教のような団体に所属することが一番有効な生き残り策であるとしている。

村井秀夫は、戦争を生き残るには、必要なものを準備した上でいかなる攻撃を受けるかを予知する能力を持つグルの指導に従うというのが、一番の上策であると述べている。麻原は、経典に「岩山に隠れ、そして木の根っこを食べた魂。あるいは山林に入り、そして木の根っこを食べた魂が生き残る」と記されているとして、富士山のような岩山に都会を造り、シェルターを造ることが望ましく、より完璧には、水底都市、海底都市、あるいは完全なる地下都市を造るのが望ましいと述べている⁵⁶⁾。

さらに、本書の第四章「日出づる国」の行方、においては、1994年までの麻原の講演や著書の中で重要と思われるものが列記されている。その一部をあげると、まず、「日本は1996年の終わりを契機として大きな変換に至るが、その前に日本の一部の権力者とアメリカが結びつき、日米決戦を行なう。」(94年3月11日⁵⁷⁾)

「20世紀の終わりから21世紀にかけてはSFの世界が現出するが、そこに

54) 『同書』179～180頁。

55) 『同書』234～236頁。

この早川の発言は、霞ヶ関へ向かう地下鉄のみにサリン事件が起きた事と関連している可能性がある。

56) 『同書』239～240頁。

57) 『同書』302頁。

は、高度な科学文明・戦い・超能力という三つの要素が展開している。」(94年1月30日⁵⁸⁾)

「第三次世界大戦のもともとの狙いというのは、都会を完全に死滅させること。そして、ある意味での無政府状態をつくること。そして、地球の統一的な政権をつくること。この三段階に計画は分類されている。」(93年6月10日⁵⁹⁾)

「世界の動向を観察すると、1996年に大きな山場が現われる。そして、この大きな山場の後キリストの登場、1997年に至って西暦が終わる」(94年8月21日⁶⁰⁾)

「タントラーナーナの修行、ヴァジラーナーナの修行をある程度行なっていくと、小さな町や村を破壊するほどの神通力が生じるわけだ。つまり、この第三次世界大戦を止めることができるのは、世界においてただ一人、わたししかいないとわたしは考えている。

そして、おそらく、それを行使する時期が来るだろう。それは、偉大なる神秘的な力と叡智によってね。そして、必ず予言が正当であれば、勝利するはずである。」(93年6月10日⁶¹⁾)

「仏教対キリスト教の戦いというのは比喩的な表現ということができます。つまり、仏教対キリスト教を奉じて物欲に支配されている魂たちとの対決になりますよと。この仏教というのは仏教ではなく、この人間の世界が一つのマーヤー、幻影であり、その幻影に立脚した、つまり本質的には意識であり、

58) 『同書』312頁、オウム真理教の教義や行動にSFやアニメの影響が顕著にみられることは多くの研究者により指摘されている。舛添要一『戦後日本の幻影<オウム真理教>』現代書林1995年。

59) 『同書』324頁。

これは、早川メモにあるように、95年11月に行なおうとしていた一種のクー・デタの予告ともいえる内容である。

60) 『同書』336頁。

麻原が、自分こそ真のキリストであり、世界史を変える人物であるというメシア意識の表明とも受けとれる内容である。

61) 『同書』341頁。

その意識そのものが空であるということに立脚した集団，対，物欲の集団の対決が最終的な対決になりますよという意味です。……非常に激しいものになると考えられます。……例えば空間1キロとか10キロの空間が瞬間的に炎となるような最終兵器が使われるようになると思います。……最終的にはこれを手中に収める方が勝利するのではないかと考えております。」(94年3月26日⁶²⁾)

地下鉄サリン事件後に出版された最後の予言書、『亡国日本の悲しみ』において、麻原は、米軍機によってばらまかれたと確信しているQ熱リケッチアと呼ばれる細菌兵器によって体をむしばまれていると述べている⁶³⁾。ついで、『ダンダキー王国最期の日』という経典について、以下のように述べている。「この経典は、国家権力も、国家権力に支配されるマスコミも、一時的に現世利益を得るかもしれないが、その後に地獄が待っているだろうことを示唆している。現在、完全なる禁欲出家修行者を不当逮捕し続けるなど、決してやってはならないことをやり、それをさらにエスカレートさせていっている。必ずや神々の怒りが爆発するであろう⁶⁴⁾。」

そして、以下のようにも述べている。

「今回の国家権力による弾圧は、それはちょうど、イエス・キリストを弾圧したユダヤが、その後流浪の民となったように、この日本に大きな災いがふりかかることだろう⁶⁵⁾。」

さらに、大本教の弾圧にふれた後で、「予言者を弾圧した場合、このような激しい国家的な災難に遭わなければならないのである。そして今存在しているオウム真理教は、それよりも精神的ステージの高い者がそろっている。……この弟子たちに対する国家の弾圧は、果たして、これから迎えるであろうハルマゲドンにおいて、日本をどのような方向に導くのか、わたしはそれ

62) 『同書』351～352頁。

63) 麻原彰晃『亡国日本の悲しみ』オウム出版1995年5月18日、6～7頁。

64) 『同書』46頁。

65) 『同書』190頁。

を考えると非常に悲しく、そして哀れみの心が出てくるのである⁶⁶⁾。」

第三次大戦後の世界に新たな精神文明を築く使命をもったオウム真理教に対する弾圧は、日本の運命を暗いものにするとするのである。このように、オウム真理教の予言は、時期毎に若干の変化がみられ、雑多な構成要素から成り、具体的かつ詳細な内容のものが多く、科学的紛飾を濃厚にしていること等がその主たる特質としてあげられる。そして、終末予言を含む予言は、主として、オウム真理教に早急に入信させようという意図のもとになされているといえよう。

6 結びに代えて

オウム真理教事件を、全体的に考察するためには、若干当教団の歴史に言及する必要があると思われるので以下、主として、島藺進の「麻原氏とオウム真理教の軌跡・年表」によりつつその概要を述べることにする⁶⁷⁾。

1955年、熊本県八代市に豊職人の四男として生まれた麻原彰晃（本名・松本智津夫）は、1975年、県立盲学校の専攻科（鍼灸）を卒業、その後、政治家を目指して東大を受験するが、いずれの大学も合格できない程度の学力だったので、当然の結果として不合格となった。東大入学をあきらめた麻原は、1977年に、鍼灸師として開業、翌年「漢方亜細亜堂薬局」を開設、81年には、「BMA」と薬局名を改め、阿含宗の「千座行」を続け、クンダリーニー覚醒を体験した。

82年6月、薬事法違反で逮捕され、「詐欺師」の側面が顕在化した例とみなす者もいる。84年5月、株式会社「オウム」を設立、事業に進出した。同年、ヨーガの修行道場を始めた。85年2月、「空中浮揚」を体験し、同年、神から「シャンバラ世界」を築く使命があると告げられたとしている。

86年3月、『超能力「秘密の開発法」』を刊行し、4月、「オウム神仙の

66) 『同書』197頁。

67) 島藺進『オウム真理教の軌跡』岩波書店1995年。

会」を名乗った。7月、インドに渡航、ヒマラヤで「解脱」の体験を得、12月、『生死を超える』を刊行した。

88年2月、『マハーヤーナ・スートラ』刊行。89年8月、「真理党」設立。同月、東京都に宗教法人として認証された。10月から『サンデー毎日』誌の批判が開始され、11月、坂本堤弁護士一家が失跡し、後に殺害と分かった。

90年2月、衆院選に立候補し全員落選した。教団は、経済的にも危機的状況に陥った。そのため、麻原が「オースティン彗星が接近しているから日本に異変が起きる」と予言し、「その異変の内容をくわしく予言する」、もしくは、「参加しないと助からない」などといって信者に危機感を抱かせて、4月の「石垣島セミナー」に約1270人参加させた。そこでは、出家が強引に求められ、教団は、参加費と出家者の布施によって多額の資金を入手し、危機的状況を脱した。

同年10月、熊本県波野村での紛争に関連して、熊本県警が強制捜査、92年6月、モスクワ支部を開設し、ロシアへの本格的進出の拠点とした。同年10～11月、各地の大学でABC兵器による世界最終戦争が起こり、大都市に壊滅的打撃があることを予言、93年3月、97年にハルマゲドンが起こると予言、94年3月、「毒ガス攻撃による被害」を受けていると主張し始めた。6月、松本サリン事件発生、7月、上九色村で異臭騒ぎ、9月、宮崎県の旅館経営者が拉致監禁されたとして教団を告訴した。

95年1月1日、読売新聞、オウム真理教のサリン疑惑を報道、2月28日、公証役場事務長・仮谷清志が拉致された。3月20日、地下鉄サリン事件発生、22日、一斉強制捜査開始、5月16日、麻原が逮捕された。6月30日、東京地検と東京都、宗教法人法に基づきオウム真理教の解散を東京地裁に請求。その後の経過は、良く知られているので省略する。

以上のように、オウム真理教は、ヨーガの修行団体として出発し、新宗教教団となり、やがては破壊的カルトの典型的特徴をほぼ全部備えた集団へと変化し、サリン事件を起こすまでに至った。以下、当論文においては、いか

なる要因によって普通の修行や救済を求めて入信した人々が、多くの犯罪的行為を犯すに至ったかという問題を主たる分析の課題とする。

まず、終末予言に関して考察すると、終末論もしくは人類最終戦争さらには教団員の生き残りは、多くの宗教の教義において広汎にみられるもので、オウム真理教のものはその一形態として位置づけられ、特に他との大きな差異は認めにくい。予言に関しても、きわめて多くの宗教教団の教義ならびに教祖の発言においてもみられる現象である。そして、予言は、象徴的なものは、解釈の仕方で異なるが、具体的なものは、はずれるケースが多い。しかし、その際にも、何らかの説明が可能な場合が多く、かつ説明が困難な場合においても認知的不協和の理論により解明されているように、布教活動が促進される場合もあり、いずれにしろ教団にとって大きな打撃とならない場合が少なくない。

オウム真理教においても、麻原の予言は、しばしばはずれているが、それが信者ならびに教団に多大の影響を与えた例は、選挙の場合を除いてはサリン事件までは、ほとんどみられなかった。その上、当教団の教義に対する信頼は、オウム真理教がヨーガの修行を基盤としているため、神秘体験をすることによって確立される場合が多く、容易にゆらぐことはなかったのである。

したがって、終末予言は多くの教団においてみられるが、オウム真理教は、その予言の自己実現のために、国家を相手にしてまで、大規模な戦闘を企てたことが特異なのである。この問題に関しては、当教団の建設大臣であった、早川紀代秀が、左翼運動の活動歴を有している人物であることに注目する必要がある。彼が、赤坂の事務所に残した「早川ノート」には、「もう戦うしかない」「1995年11月戦争」「戦車T72中古20万～30万ドル」「兵士は200人OK」といった過激な言葉があり、教団武装化の中心人物であったことを示唆している⁶⁸⁾。

早川は、最初からむしろ政治的活動をするのが主たる目的でオムウ真理教

68) 毎日新聞社会部『冥い祈り——麻原彰晃と使徒たち——』毎日新聞社、1995年、

に入団した可能性があるが故に、麻原との関係がいかなるものであったかがより重要な問題となる。筆者は、早川は宗教面では麻原を一応、師としてあおぎつつも、日常生活のレベルでは、むしろ麻原を指導していた側面もあったものと推測している⁶⁹⁾。さらに、早川の行動は、オウム真理教の背後に、強大な勢力の一部が関与していた可能性をも示唆しているといえよう⁷⁰⁾。

ついで、オウム信者の行なった犯罪行為に関して、彼らをそのような行為に追いやった要因の分析を試みる。まず、マインド・コントロールに関しては、出家の制度を作ったことにより、情報遮断、生活条件のコントロール等を容易にしたこと。ついで、ヨーガという修行体系をもっていたため、神秘体験を経験できた者が多く、その事が、麻原が説く教えの正しさを実証するものとして受けとられたことが重要な要因としてあげられる。それに加えて、94年頃からは薬物による強引な神秘体験への導入も行なわれていた。

ところで、上田が述べているように、教祖もまた、マインド・コントロールされていた面があり、早川らの影響を部分的にしる受けたものと思われる。第一、文化というものの自体が、マインド・コントロールの装置であり、教育もマインド・コントロールの一つという側面があり、宗教のみが、マインド・コントロールの装置でないことはいうまでもない事実といえよう。

ついで、権威に対する服従という視点から分析すると、一種の擬似国家を形成し、少なくとも大多数の信者により、絶対的権威を体現しているとみなされていた麻原からの命令は、信者の自発的な行為と心理的に根本的に異な

85頁。

69) 『同書』82頁には、早川に麻原がビラの折り方が気に入られなくて、叱られている場面が書かれている。

70) この問題に関しては、多くのジャーナリストが言及している。

板垣英憲『オウム事件と宗教政治戦争』三一書房、1995年。

James A. Haught, *Holy Hatred: Religious Conflicts of the '90s*, Prometheus Books, 1995. ジェイムズ・A. ホート、佐藤伸行他訳『世紀末宗教戦争マップ』時事通信社、1996年。さらにCIAの『オウム真理教事件報告書』、ロシア内務省の『オウム教団活動関連調査報告書』は重要な資料とされ、DIAレポートも参照に価するという。

っていても、権威からの命令であるが故に行なわれる場合が多いことは、前述のミルグラムの実験によってもすでに実証されている。

ミルグラムが述べているように、個々の信者の道徳的要因も、外部の情報を遮断し、選択された情報のみを提示し、かつ麻原の命令を聞かざるをえない社会的状況の中におくことにより、握りつぶすことが可能であったといえる。

さらに、オウム真理教の幹部には、理系の科学者が多いが、彼らは科学的真理の追求という、一般には社会に役立つ道徳的な目標を与えられ、しかも人類救済や新たな科学の形成というような、より大きな目的の一環を担う事をも目標として与えられ、研究に従事していた。しかし、まさにミルグラムが述べているように、その目的と称されていたものが、多くの人の命を奪う結果を生ぜしめるに至ったのである。

そして、ミルグラムがさらに述べているように、信者は、自分を指図している麻原らの権威に対しては、責任を感じるが、その命じられた行為の内容については、たとえ反社会的なものであっても、それほど責任を感じなくなり、道徳は、信者が麻原らに対する責務をどの程度果たすかという点にかかわるようになったのである。しかも、その責務の遂行に対しては、教団内における地位の上昇を含む、何らかのみかえりが与えられていた場合が多かったのである。

ミルグラムが述べているように、信者がいかにふるまうのかを決定するのは、彼がどんな種類の人間かというより、どんな種類の状況におかれていたかということであるが故に、オウム真理教の犯罪行為は、信者の資質にその要因を求めるよりは、むしろ、教団の組織形態や教団運営の手法にその成因を求める方がより適切であるといえよう。

以上のように、社会心理学の理論は、オウム真理教事件の分析においても有効であり、筆者は、社会心理学に対する批判は、理論そのものに向けられるよりは、むしろ研究者の問題意識に対してなされた方が、より生産的であ

ると判断せざるをえない。

しかし、その反面、オウム真理教事件は、グローバルで複雑な背景を有している可能性があり、その部分の解明なくしては、その真相と深層の究明は不可能に思われるのもまた事実である。麻原や教団幹部にのみ分析の対象を限定することは、オウム真理教事件の解明を不十分なものにしてしまう可能性を孕んでいるのではなかろうか。

Eschatological Prophecy, Mind Control and
Obedience to Authority: A Social Psychological
Analysis of the Aum Shinrikyo Case

Kenya Numata

The purpose of this paper is analyzing the Aum Shinrikyo Case with special reference to eschatological prophecy, mind control and obedience to authority. First, I refer to the consideration of cult. Second, I analyze the theory of eschatological prophecy. Third, I analyze the theory of mind control and obedience to authority. Fourth, I refer to the eschatological prophecy of Aum Shinrikyo. I conclude by saying that the social psychological study is indispensable to analyze the Aum Shinrikyo Case.